

出帆

芥川龍之介

青空文庫

成瀬君なるせ

君に別れてから、もうひとつき一月の余になる。早いものだ。この分では、存外容易に、君と僕らとを隔てる五、六年が、すぎ去つてしまふかもしれぬ。

君が横浜を出帆した日、銅鑼どらが鳴つて、見送りに来た連中が、皆、梯子はしご伝いに、船から波止場はとばへおけると、僕はジョオンズといつしよになつた。もつとも、さつき甲かんばん板ではちよいと姿を見かけたが、その後、君の船室へもサロンへも顔を出さなかつたので、僕はもう帰つたのかと思つていた。ところが、先生、僕をつかまえると、大元氣だいげんきで、ここへ来るといつでも旅がしたくなるのか、

己おれも来年かさ来年はアメリカへ行くとか、いろんなことを言う。僕はいいかげんな返事をしながら、はなはだ、煮切らない態度で、お相手をつとめていた。第一、ばかに暑い。それから、胃がしくしく、痛む。とうてい彼のしやべる英語を、いちいち理解するほど、神経を緊張する気になれない。

そのうちに、船が動きだした。それも、はなはだ、緩かんまん慢な動き方で、船と波止場との間の水が少しずつ幅を広くしていくから、わかるようなものの、さもなければ、ほとんど、動いているとは受取れないくらいである。おまけに、この間の水なるものが、非常にきたない。わらくずやペンキ塗りの木の片きれが黄緑色に濁った水面を、一面におおっている。どうも、昔、森さんの「棧さんばし橋」

とかいうもので読んだほど、小説らしくもなんともない。

麦わら帽子をかぶって、茶の背広を着た君は、扇を持って、こ
つちをながめていた。それも至極通俗なながめ方である。学校か
ら帰りに、神田かんだをいっしょに散歩して、須田町すだちょうへ来ると、いつ
も君は三田みた行の電車へのり、僕は上野うえの行の電車にのった。そうし
てどつちか先へのつたほうを、あとにのこされたほうが見送ると
いう習慣があつた。今日きょう、船の上にいる君が、波止場はとばをながめる
のも、その時とたいした変わりはない。(あるいは僕のほうに、
変わりがないせいだろうか)僕は、時々君の方を見ながら、ジョ
-onsとでたらめな会話をやっていた。彼はクロンプトン・マツ
ケンジイがどうか言つたかと思うと、ロシアの監獄へは、牢ろうや

ぶりの器械を売りに来るとかなんとか言う。何をしやべっているのだか、わからない。ただ、君を見送ってから彼が沼津ぬまつへ写生にゆくということだけは、何度もきき返してやつとわかった。

そのうちに、気がついて見ると、船と波止場との距離が、だいぶん遠くなっている。この時、かなり痛切に、君が日本を離れるのだという気がした。皆が、成瀬君万歳と言う。君は扇を動かして、それに答えた。が、僕は中学時代から一度も、大きな声で万歳と言ったことがない。そこで、その時も、ただ、かぶっていた麦わら帽子をぬいで、それを高くさし上げて、パセティックな心もちに順応させた。万歳の声は、容易にやまない。僕は君に、いつか、「燃焼しない」（君のことばをそのまま、使えば）と言っ

て非難されたことを思い出した。そうして微笑した。僕の前では君の弟が、ステツキの先へハンケチを結びつけて、それを勢いよくふりながら「兄さん万歳」をくり返している。……

こうかんばん

後甲板には、ロシアの役者が大ぜい乗っていた。それが男は、

たいてい、うすぎたない日本の浴衣ゆかたをひっかけている。いつか本

んごうざ

郷座へ出た連中であるが、こうして日のかんかん照りつける甲

板に、だらしのない浴衣がけで、集っているのを見ると、はなは

だ、ふるわない。中には、赤い頭巾ずきんをかぶった女役者や半ズボン

をはいた子供も、まじっていた。——すると、その連中が、突然

声をそろえて、何か歌をうたいだした。やはり浴衣がけの背の高

い男が、バトンを持っているような手つきで、拍子ひょうしをとつてい

るのが見える。ジヨオンズは、歌の一節がきれるたびに、うなずいて「グツド」と言った。が何がグツドなのだが、僕にはわからない。

船のほうは、その通り陽気だが、波止場のほうはなかなかそうはいかない。どつちを見ても泣いている人が、大ぜいある。君のおかあさんも、泣いていられた。妹たちも泣いていたらしい。涙は見えなくとも、泣かないばかりの顔は、そこにもここにもある。ことに、フロックコオトに山高帽子やまたかぼうしをかぶった、年よりの異人いじんが、手をあげて、船の方を招くようなまねをしていたのは、はなはだ小説らしい心もちがした。

「君は泣かないのかい」

僕は、君の弟の肩をたたいて、きいてみた。

「泣くものか。僕は男じゃないか」

さながら、この自明の理を知らない僕をあわれむような調子である。僕はまた、微笑した。

船はだんだん、遠くなつた。もう君の顔も見えない。ただ、扇をあげて、時々こつちの万歳に答えるのだけがわかる。

「おい、みんなひなたへ出ようじゃないか。日かげにいと、向こうからこつちが見えない」

久米くめが、皆をふり返つてこう言った。そこで、皆ひなたへ出た。

僕はやはり帽子をあげて立っている。僕のと年には、ジョオンズが、怪しげなパナマをふっている。その前には、背の高い松まつお

岡^かと背の低い菊池^{きくち}とが、袂^{たもと}を風に翻しながら、並んで立っている。

そうして、これも帽子をふっている。時々、久米が、大きな声を出して、「成瀬^{なるせ}」と呼ぶ。ジョオンズが、口笛をふく。君の

弟が、ステッキをふりまわして「兄さん万歳^{れんきやう}」を連叫^{れんきやう}する。

——それが、いよいよ、君が全く見えなくなるまで、続いた。

帰りぎわに、ふりむいて見たら、例の年よりの異人^{いじん}は、まだ、ぼんやり船の出で行った方をながめている。すると、僕といつしよにふりむいたジョオンズは、指をぴんと鳴らしながら、その異人の方を頼^{たの}でしやくつて He is a beggar とかなんとか言った。

「へえ、乞食^{こじき}かね」

「乞食^{こじき}さ。毎日、波止場をうろついているらしい。己はここへよ

く来るから、知っている」

それから、彼は、日本人のフロツクコオトに対する尊敬の愚^ぐなるゆえんを、長々と弁じたてた。僕のセンチメンタリズムは、ここでもまたいよいよ「燃焼」せざるべく、新に破壊されたわけである。

そのうちに、久米と松岡とが、日本の文壇の状況を、活字にして、君に報ずるそうだ。僕もまた近々に、何か書くことがあるかもしれない。

(大正五年九月)

青空文庫情報

底本：「羅生門・鼻・芋粥」角川文庫、角川書店

1950（昭和25）年10月20日初版発行

1985（昭和60）年11月10日改版38版発行

入力：j.utiya

校正：かとうかおり

1999年1月12日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

出帆

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>